

# 博士論文：多文化共生社会の現実と展望

## 論文要約

大槻茂実

グローバリゼーションの進展、人々の関係性への注目が高まっている。そうした中、日本社会は近代社会、すなわち自由で自立した個人の織り成す社会になり得たのか。本研究は、人種・民族・国籍の境界から近代社会としての日本社会の開放性をとらえようとした。特に本研究では計量的データ・質的データいずれをも含む経験的データ分析にもとづき、人種・民族・国籍の境界をめぐる人々の関係性として、多文化共生に焦点を定め、市民社会における多文化共生の現実と展望を論じた。

より具体的には以下の手順で研究を進めた。まず、第1章で提示した上記の問題関心をもとに第2章で戦後の日本経済と労働市場の変化に留意しながら、多文化共生にかかわるエスニシティ研究の年代的整理を行った。特に、日本社会もまた第二の近代化の過程にあるのだとすれば、人種・民族・国籍を異にする人々の関係性の再考が必然的に生じると位置づけ、そうした視座から日本社会において共生のあり方の「迷走」状態は、単なる日本国内の政策的観点の失敗という位置付けのみならず、グローバルレベルにおける第二の近代化過程において必然的に生じた現象であるということを指摘した。換言すれば、日本社会における共生のあり方を検討することは、第二の近代化過程における属性原理にもとづいた人々の関係性の変化を捉えることに結びつくことを示しているといえる。以上の点を本研究が人種・民族・国籍の境界をめぐる人々の関係性である多文化共生を研究対象とする研究意義として位置づけた。

第3章では本研究の分析枠組みを提示した。具体的には先行研究の整理のもと、政策用語として使用される一方で曖昧性が否めない「多文化共生」を測定可能な学術用語として指標化した。すなわち、「自立型共生」「序列型共生」「回避型共生」「排除型共生」である。その上で、先行研究における知見をもとに、権利が対等で相互のコミュニケーション志向が高い共生像である「自立型共生」を最も進歩的な共生社会像と位置づけ、その規定要因を探る分析枠組みを示した。

第4章では本研究が調査対象地として設定した東京都羽村市、東京都多摩市の概況について歴史的状況を俯瞰した上で、統計データを利用して数量的に両市の特性を考察し、第5章・第6章で執筆者自らが行った計量的社会調査データの分析結果を提示した。第7章では前章までの計量データ分析を通して得られた知見をもとに、執筆者が自ら行った質的社会調査データの分析を行い、問題関心についてのトライアングレーションを行った。そうした分析内容は多文化共生にかかわる日本人の意識や行動についての分析であったが、共生という社会現象が異なる人々の関係性である以上、外国人側についてのデータ分析も必要となる。そこで、第7章まで得られた分析結果を補強する形で外国人に対する面接調査の内容について補足的に分析を行った（第8章）。

分析章（第5章から第8章まで）での主要な分析結果は、以下のように要約される。計量的データ分析から、日本人の共生意識に対して外国人との交流経験の効果が導出された。すなわち、他の変数を統制した上でも、交流経験がある場合の方が排除型共生よりも自立型共生を、回避型共生よりも自立型共生を、回避型共生よりも序列型共生を、排外型共生よりも序列型共生を志向する傾向にあった。以上の分析結果から、人々が共生社会のあり方を判断する際には、外国人との交流経験が重要な判断

材料となっていることが指摘した。質的データ分析では、計量データ分析から導出された交流経験についてその規定要因を探索的に捉えた。分析の結果、積極的交流を可能とさせる社会行為としては、地域社会での偶発的・受動的な外国人との接触経験と、本人もしくは近い人間の中・長期的海外滞在経験が導き出された。その上で、そうした海外滞在経験を可能とさせる要件として、当人の経済的・時間的（すなわち社会的）ゆとりの多寡を指摘した。また、補足分析での分析結果も含めて、執筆者が参与観察を行った日本語教室など積極的な共生がすすむ社会的場面においても、対等性の確保は現実的に困難であり、その意味で日本人と外国人との対等性の確保をその要件の1つとする自立型共生の困難性を経験的データから指摘した。

終章（第9章）では、それまでの分析結果を踏まえて本研究の問題関心についての考察を行った。地域比較分析を行った本研究の知見のもとつき地域をまたいだ共生にかかわる合意形成の困難について論じ、地域生活における問題関心と社会全体の問題関心と連結がいかんにして可能となるのか、今後検討していく必要があることを指摘した。また、理想解としての自立型共生の盲目的な模索を経験的なデータ分析の結果から批判するとともに、現実解として序列型共生の可能性を積極的に議論する必要性を指摘した。また、こうした共生のあり方は発展性があることを指摘した。それと同時に、この発展性の軌跡はグローバリゼーションの進展の中、第二の近代化の過程にある近代社会とりわけ日本社会が直面する属性原理から業績原理への転換がどのようになされていくのかを観察することでもあることを論じた。

以上